

令和 7 年度 愛知教育大学入学試験問題
標準的解答例または出題の意図及び評価の観点

【前期日程】

科目名：総合問題（学校教育科学専修）

問題 I

問 1 （出題の意図）基礎的な語彙力を問う

（解答） ①素描 ②表象 ③繊細 ④確執 ⑤触発

問 2

（出題の意図）

テキスト全体を通して筆者の問題提起や主張を的確に読み取る理解力、またその要旨を適切にまとめる構成力を問う。

（評価の観点）

筆者の主張を正確に読み取っていること、要旨を適切にまとめ、かつ、文章表現が適切であること。

問 3

（出題の意図）

テキスト全体を参照しながら、筆者の主張を問いに対応した文章へと再構成する思考力、および表現力を問う。

（評価の観点）

「教師の自律性の衰退」「学校組織の管理化」に対する筆者の主張に触れながら、自らの論拠を示し、論理的に述べていること（思考力・表現力）。

問 4

（出題の意図）

筆者の問題提起や主張を正確に読み取り、その内容から具体的な例とその課題を考える力を問う。またその課題に対し、自らの経験知と照らし合わせながら論理的に解決方法を考えることができる思考力、および判断力（課題の解決方法を判断するということ）を問う。

（評価の観点）

- ① 問題文の論旨を踏まえ、自身の言葉で論理的に表現していること（思考力・判断力）。
- ② 文章の構成が明確であり（一貫性）、文章表現が適切であること（語彙力・表現力）。

問題 II

(出題の意図)

持続可能な開発目標 (SDGs) のひとつである「ジェンダー平等を実現しよう」は教育にとって大きな課題である。欧米諸国ではジェンダーと教育に対する研究、政策および実践は積み重ねられてきたが、日本ではいまだ十分とは言えない状況である (PISA や TIMSS の国際比較の結果を見れば、明らかである)。

日本の「遅れた」状況のひとつの要因として、ジェンダーに対する規範と、その規範にもとづく「思い込み」(例えば、女性は理数系科目が苦手、女の子／男の子の好きな色など) が教育に携わる者のなかにも根強く存在していることが挙げられる。

そうした認識のもとで、本学を志望する受験生がジェンダーと教育の問題、あるいはその背後にある「思い込み」に対して冷静に検討できるか、またそうした問題を解決しうる提案ができるのかを本題で問う。出題は実証経済学の書籍からであるが、その意図は自身の経験だけで教育のあり方 (ジェンダーと教育) を考えるのではなく、データを読み、実態を分析し、そのうえで改善策を論理的に提案できるか、その能力を測定することにある。

問 1

ノーベル賞受賞者などのごく一部の情報から、男性は女性よりも理数系の科目が得意であるという全体を飛躍的に推測する思い込みを指す。

問 2 ④

問 3 数学の標準偏差 : 3 理科の標準偏差 : 2 相関係数 : 0.533

途中式

数学の点数を x 、理科の点数を y とすると、表から平均、標準偏差、共分散の値は

$$\text{平均 } x = \frac{(8+10+5+\cdots+2)}{10} = 6 \quad \text{平均 } y = \frac{(4+2+2+\cdots+2)}{10} = 4$$

$$\text{標準偏差 } x = \sqrt{\frac{1}{10} \sum_{i=1}^{10} (x_i - 6)^2} = 3 \quad \text{標準偏差 } y = \sqrt{\frac{1}{10} \sum_{i=1}^{10} (y_i - 4)^2} = 2$$

$$\text{共分散 } xy = \frac{1}{10} \sum_{i=1}^{10} (x_i - 6)(y_i - 4) = 3.2$$

となり、ゆえに相関係数は

$$\text{相関係数 } xy = \frac{\text{共分散 } xy}{\text{標準偏差 } x \times \text{標準偏差 } y} = \frac{3.2}{3 \times 2} = \frac{8}{15} = 0.533 \cdots$$

である。

問 4

What the empirical results show is not that girls are naturally ill-suited to math and science, but that these assumptions are imprinted by teachers, parents, and other adults around them, and as a result, they really are not good at math and science.

問 5

女子生徒は生まれつき理数系科目が不得意というわけではなく、周りの大人たちのアンコンシャス・バイアスの影響を受けている。課題文の例で言えば、女性は数学が苦手であるという数学教師が持つバイアスが強ければ、女子生徒の数学の点数が下がる可能性があり、さらには進路選択にもネガティブな影響を及ぼす。

こうした状況を変えるためには、研修などを通して教師は自身のアンコンシャス・バイアスを意識し、取り除いていくことが求められよう。しかしそれだけではなく、アンコンシャス・バイアスを助長しない環境づくりも重要である。

環境づくりという観点から図 2 を見ると、日本の中学校の数学教師と理科教師では男性の占める割合が非常に高い。こうした状況では、教師の比率という「わずかな事実」から女子生徒は数学や理科が不得意であるというステレオタイプが発生しやすくなると考えられる。日本の教師が置かれた環境は、アンコンシャス・バイアスが助長しやすい可能性がある。そうした事態を避けるためにも、数学教師と理科教師における女性比率を上げることが求められる。

そこで、ふたつの政策案を提言したい。ひとつ目が、教員養成機関に対する政策である。数学及び理科の教師を養成する大学を中心に、入試に「女性枠」を設け、入学者に占める女性の比率を上昇させる。ふたつ目が、教員採用に対する政策である。採用に際して、各自治体は数学と理科の教師における性別比率を確認したうえで、バランスを鑑みながら「女性枠」を設ける。

こうした政策を実施することで、女子生徒は理数系科目が不得意であるといったアンコンシャス・バイアスが教師間で助長されにくい環境が整備されると思われる。そして、教師のアンコンシャス・バイアスから女子生徒がネガティブな影響を受けることは少なくなると期待される。